



都会は巨大な石材標本室

文・写真

西本 昌司 にしもと しょうじ
(名古屋市科学館主任学芸員)

歴史的建造物などに使われている石材が同定できれば、産地もわかり、歴史や文化を読み解けます。さらに、地質学と結びつけることができれば、街全体が石材標本室となるでしょう。

街歩きは石めぐり

国立科学博物館日本館の階段に使われている石材の中にアンモナイトを見つけたことがある人は多いのではないのでしょうか(図1、図2)。渦巻き模様のアンモナイトを見つけるとなんだか嬉しくなるものです。

つい化石ばかりに目が奪われがちですが、実は石材そのものも貴重品です。「ネプロロザート」という銘柄で、地質学的には石灰岩ですが、石材としては「大理石」と扱われます。日本の建造物でこの石材が使われていれば、その建物は文化財級でしょう。なにしろ、ネプロロザー



図1 国立科学博物館日本館中央ホールの壁や床には、現在では入手困難で貴重な石材が使われている。© 国立科学博物館

トは、日本で初めてイタリアから輸入された「大理石」の一つです。日本館のほかには、日本橋高島屋S.C.本館(図3)や日本橋三越本店などの歴史的建造物で使われています。

実際、歴史的建造物には、石材がたくさん使われています。壁、柱、マントルピース、テーブルなど、石を加工してつくったものが多く、目を奪われることがしばしば。どんな石でつくられているのか気になって仕方ありません。私にとって、街歩きは石めぐりです。

石材調べの重要な手がかりは「見かけ」

歴史的建造物に限らず、石器、古墳の葺石(墳丘の表面に敷きつめた石)、城の石垣といった遺跡まで、私は石材の世界にどっぷりつかってしまいましたが、いくら経験を積んでも、見たことのない石を同定することは難しいものです。なにしろ、文化財の場合、使われている石材を砕いて分析するわけにもいかず、肉眼で見るだけ、つまり、「見かけ」で判別することが求められます。

そこで頼りになるのが、標本です。

当たり前にも思われるかもしれませんが、最近、標本が



図2 国立科学博物館日本館北側階段の石材「ネプロロザート」に見られるアンモナイトの化石



図3 イタリア産「大理石」「ネプロロザート」でつくられた日本橋高島屋S.C.本館の階段手すりや柱



図4 矢橋大理石株式会社に保存されている石材見本(一般には公開されていません)



図5 オックスフォード大学自然史博物館に保管されている石材コレクション「Corsi Collection of Decorative Stones」(一般には公開されていません)

これほど役立つことを実感したことはありませんでした。岩石を科学的に研究するには、薄片の顕微鏡観察をしたうえで、化学組成や同位体組成などが重要となります。それを「見かけ」だけで判断してしまうのは、現代の岩石学からすると、なんともモヤモヤした感じがぬぐえないのですが、保存が最優先なのでからやむを得ません。数値化できず、科学的アプローチがしにくいけれど、石材を調べるために、「見かけ」はきわめて重要な手掛かりなのです。そもそも石材が選ばれた理由として「見かけ」は重要だったはずですし…。

しかし、加工された石材は、自然の状態の岩石とは表情が変わってくるので、石材標本を見ておくことも欠かせません。近代の建築に使われている石材を同定するのに頼りになったのは、矢橋大理石株式会社で見せていただいた石材見本です(図4)。同社は国会議事堂などの歴史的建造物の石材工事を手がけた老舗で、ネプロロザートをはじめ、近代建築を飾ったいくつかの石材を保存しています。そんな石材の実物を何度も手に取って観察させていただけたおかげで、少しずつ石材を見分けられるようになりました。小さな石材を何度も見ても新しい気付きがあるのですから不思議なものです。

英オックスフォード大の石材コレクション

石材研究には欠かせない石材標本を保有し、科学的に研究している博物館なんてあるのでしょうか。調べてみると、イギリスのオックスフォード大学自然史博物館に、すごい石材コレクションがあることを知りました。イタリア人のファウステイーノ・コルシ(Faustino Corsi、1771-1846年)という法律家が19世紀初頭に集めた装飾用石材のコレクションです(図5)。

これは見に行くしかない。そう思った私は、同博物館を訪れました。そこで見聞きしたことは、私にとって衝撃でした。単に珍しい石材を集めたコレクションという

わけではなく、コルシ自身が「大理石」「石膏」「蛇紋岩」などに分類し、当時の知見をまとめたカタログまでつくっていたのです。日本がまだ江戸時代だったころに、石材を科学的・地質学的な視点から調べていた人がいたのですから驚きです。さらに、現代地質学に基づいた研究も重ねられ、ヨーロッパで当時流通していた石材(主に大理石)の研究リソースとして活用できるよう整理されていました。これぞ博物館の仕事。標本というのは、科学的情報とリンクさせてこそ、新しい知識を生み出していくのだと感じました。その成果は同博物館のウェブサイト*でも公開されています。

地質学などと結びつければ街が石材標本室に

日本の自然科学系の博物館で、地質学の視点から体系的に整理されたこんな石材コレクションにお目にかかったことはありません。石材業界には「往年の銘石」とよばれる石材サンプルがひっそりと保存されているのかもしれないですが、科学的な情報とリンクされているわけではないでしょう。かといって、石材コレクションを整備することも簡単ではないでしょう。

それならいっそ、街ごと石材博物館と扱ってみてはどうでしょう。歴史的建造物や現代のビルなどに使われている石材を、文化、歴史、地質学など、複数の視点から多面的に見るのです。そうすれば、都会が巨大な石材や岩石の標本室に見えてきます。

このところ「街歩きブーム」となっている感があります。せっかくなら、街の中で見られる石材を通して、岩石や地質にも興味をもつ人が増える契機になってほしいと密かに思っています。

* Corsi Collection of Decorative Stones (Oxford University Museum of Natural History) <http://www.oum.ox.ac.uk/corsi/stones>

【参考文献】

1. 西本昌司：『東京「街角」地質学』イーストプレス(2020)
2. 西本昌司：『街の中で見つかる「すごい石」』日本実業出版社(2017)